

# ～都市風景の記録者～ 「織田一磨と東京風景」展

会期:2014年 6月14日(土)～ 9月 7日(日)

会場:&lt; GAS MUSEUM がす資料館&gt;ガス灯館2階「ギャラリー」

## ごあいさつ

GAS MUSEUM がす資料館では、ギャラリー 第71回企画展として、2014年 6月14日(土)から9月 7日(日)までの期間、「～都市風景の記録者～『織田一磨と東京風景』」展を開催します。

1882年(明治15)に東京に生まれた織田一磨は、兄に絵を学ぶほか石版技術を取得し、1916年(大正5)から翌年にかけて、自画石版画集「東京風景」を制作しました。

二十枚の東京風景は必ずしも東京の名所ではなく、自身が興味を引かれた場所が取り上げられました。江戸と近代化が混在する都市風景が表現された石版画は、震災前の東京を記録することにもなりました。美術表現の技法として、石版を取り上げた草分けとなった織田一磨は、引き続き「大阪風景」をはじめ、各地の風景を石版画で制作するほか、浮世絵研究に関する書籍刊行も手がけました。

晩年アトリエを構えた吉祥寺に居住し、1956年(昭和31)に73歳で亡くなるまで過ごしました。

今回は永井荷風による序文と共に、江戸から明治が混在する都市風景を石版画で表現した「東京風景」全20点と、現在の風景を写した写真を比較展示して紹介します。

## GAS MUSEUM がす資料館

### ■展示作品一覧

#### 【展示解説】

学芸員 高橋 豊

### 自画石版「東京風景」二十景

1916年(大正5)から約1年半の期間をかけて制作された、東京各所の風景を描いた二十枚の連作です。当初は一枚ごと制作配布し、1917年(大正6)に作品「神楽坂」の完成を持って刊行が終了すると、二十枚の作品に台紙をつけ、凡例と永井荷風氏の序文と合わせて販売しますが、2～3部しか売れなかったといわれています。

織田一磨自身は、この作品から「自覚的芸術版画」として認め、後に自身でまとめる「自画自版目録」では、これらの作品からまとめられています。

制作した作品については凡例のなかで下記のように記述しています。

『風景の選択に就いては全く自由であった。所謂名所として名高い場所や伝説的に有名な土地とは関係なく、余の面白いと感じた風景は之を描写するのに躊躇しなかったのである。』

#### 1) 東京風景 愛宕山

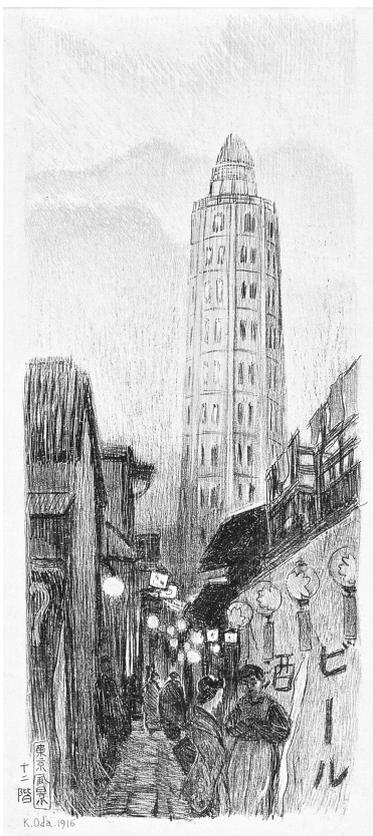
織田一磨 1916年(大正5)1月

愛宕山には、江戸の防火の守り神として徳川家康により奉られた愛宕神社があり、標高約26mあまりの高台は、江戸時代より景勝地でありました。

作品は愛宕山下の神社参道からの風景を描いており、人力車や、高台の茂みの間に見える、丸いドームの愛宕塔の姿が、江戸時代とは異なる風物になります。震災で愛宕塔が倒壊してしまうと、その跡地にはNHK愛宕山放送局が建てられ、現在ではNHK放送博物館があります。

#### 2) 東京風景 十二階

織田一磨 1916年(大正5)2月



作品名にある「十二階」とは、1890年(明治23)11月に開業した凌雲閣(りょううんかく)のことで、12階建ての建物内部には、売店のほか電動式エレベーターを備え、屋上からは東京各所を眺めることができました。

塔の下は行楽の場として発展し、明治40年代に入ると活動写真館(映画館)が立ち並び、塔から人々の足は離れ、塔から眺めるのではなく、塔のある風景を眺める形へと変わりました。作品は、賑わう浅草の街の向こうに見える、「十二階」の姿を描いています。

#### 3) 東京風景 日本橋

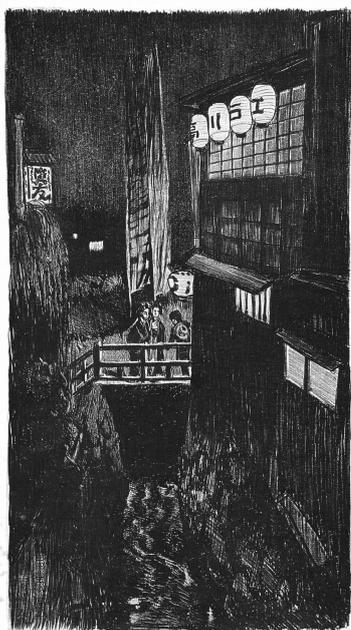
織田一磨 1916年(大正5)2月

作品は、日本橋を魚河岸より眺めた風景と考えられます。遠方には、ビル群や完成して間もない日本橋の姿が見えるのに対して、手前の魚河岸には船が並び、この地が江戸時代より変わらず水運の拠点であったことが分かります。

作品が描かれて数年後、関東大震災により被害を受けた魚河岸は築地へ移転しますが、日本橋は現在も変わらず石造り二連アーチ橋の姿をとどめています。

#### 4) 東京風景 目白坂下

織田一磨 1916年(大正5)3月



目白坂下の江戸川橋付近にあった、寄席の風景を描いています。作品の提灯にも見える江戸川亭は、高名な寄席ではありませんが、一磨自身は「余の美感を誘ふに充分であったが為」に描写したと語っています。江戸川亭は江戸川公園入口の並びに建つ、2階が客席になった講談を中心とした寄席です。夏などは植え込み越しに公園内で芸人の語りが楽しめたと、作家の藤森成吉は記しています。

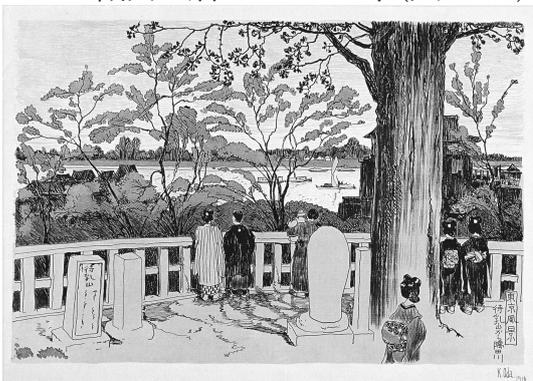
作品内の水の流れは、池袋西口にあった丸池を水源とする弦巻川と考えられ、現在では高速道路の高架下となっています。

#### 5) 東京風景 小舟町河岸

織田一磨 1916年(大正5)4月

#### 6) 東京風景 待乳山から隅田川

織田一磨 1916年(大正5)5月



#### 7) 東京風景 柳橋之雨

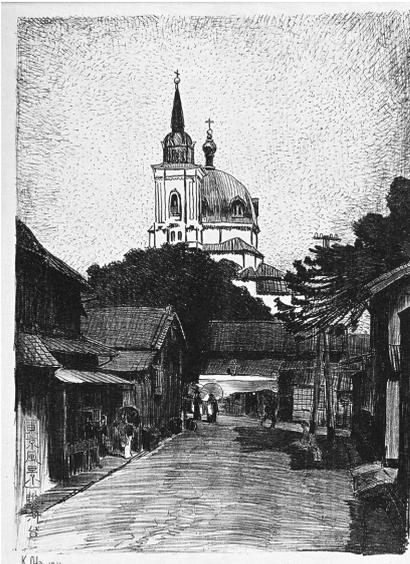
織田一磨 1916年(大正5)5月

神田川が隅田川に注ぐ、河口近くにかかる橋が柳橋です。作品は、上流の岸边より1887年(明治20)に鉄橋へ改架された橋を眺めています。橋の姿は岸に並ぶ柳の木の葉で隠れ、欄干が僅かに見えるのみです。かつてこのあたりには料亭が立ち並んでおり、作品では雨中の岸沿いをゆく柳橋芸者の姿が、花街(かがい)であった頃の様子を伝えてくれています。

#### 8) 東京風景 駿河台

織田一磨 1916年(大正5)6月

作品に描かれたニコライ堂は、正式名称を「東京復活大聖堂」といい、日本に正教会を伝えた聖ニコライの名前に由来しています。1891年(明治24)に完成した建物は、鐘楼を脇にドームを中央に設け、実施計画にはJ.コンドルが関わったと言われています。



駿河台の高台に建つ建物は、東京のランドマークとなりました。震災で鐘楼の倒壊やドーム天井の落下に見舞われましたが、修復され、現在もその地で信仰を集めています。しかし建物周りの環境は大きく変化し、林立するビル群にその姿は埋没しています。

#### 9) 東京風景 和田倉門

織田一磨 1916年(大正5)6月

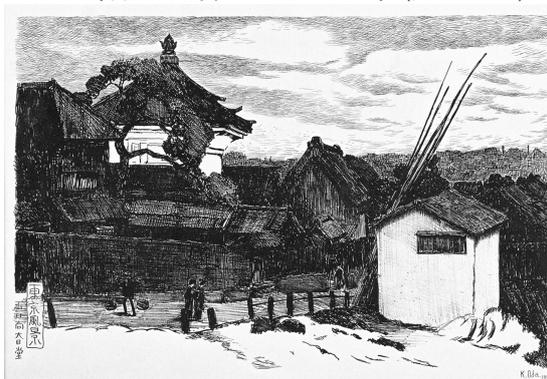
渡櫓門(わたりやぐらもん)と高麗門(こうらいもん)で構成された、和田倉門の渡櫓門が描かれています。描かれた渡櫓門は関東大震災で大破してしまい、1924年(大正13)に解体されてしまいます。残された高麗門は、戦災により焼失した半蔵門の代わりとして移築され、現在は石垣が残るのみです。

#### 10) 東京風景 大根河岸

織田一磨 1916年(大正5)7月

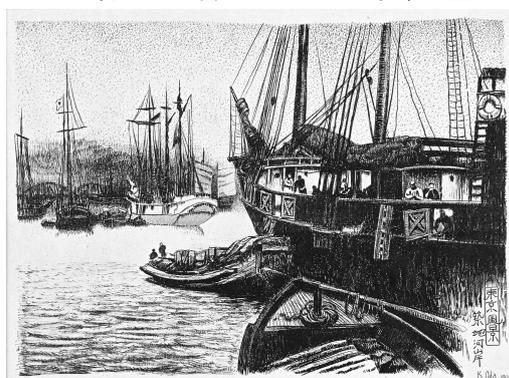
#### 11) 東京風景 小日向大日堂

織田一磨 1916年(大正5)7月



#### 12) 東京風景 築地河岸

織田一磨 1916年(大正5)8月



作品名にある「築地河岸」の名称の地はなく、隅田川を明石町あたりより眺めた風景と考えられます。現在の明石町あたりは、かつては築地外国人居留地として海外に開いた東京の窓口で、明石河岸もありました。関東大震災以降、築地の旧海軍用地は中央市場として整備され、1935年(昭和10)に完成した東京都中央卸売市場が、現在に至るまで東京の食を支えています。

### 13) 東京風景 洲崎の景

織田一磨 1916年(大正5)8月



洲崎遊郭は、1888年(明治21)に本郷根津遊郭に対して移転命令が出されて、現在の江東区東陽町に誕生しました。

洲崎弁天南東の約二千坪を、埋め立てて整備して完成した敷地は、翌年には営業を開始しました。

中でも敷地約六百坪を誇った「八幡楼」の屋上には、時計塔が備わっており、作品の中央奥に描かれている塔がこれにあたると思われます。

### 14) 東京風景 上野広小路

織田一磨 1916年(大正5)10月



かつての下谷広小路を、上野公園側より眺めた風景です。

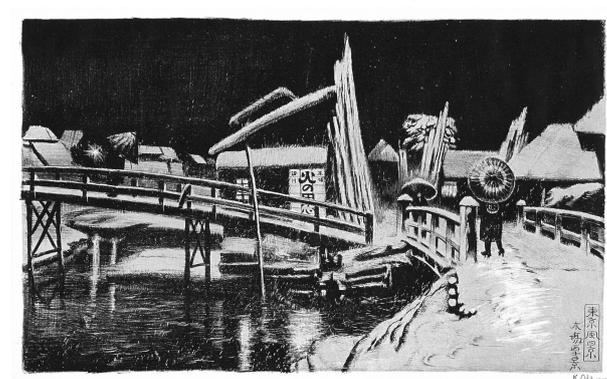
道には市電が走り、その両側には、和風の建物の間に時計台を備えた建物のほか、「ライオン歯磨」の広告塔、建設中の上野松坂屋の建物も描かれています。

この建物は、1917年(大正6)12月に完成した木骨石張り4階建ての建物でしたが、震災で焼

失してしまいました。作品は東京の移り変わりの一瞬を記録したともいえます。

### 15) 東京風景 木場雪景

織田一磨 1917年(大正6)1月



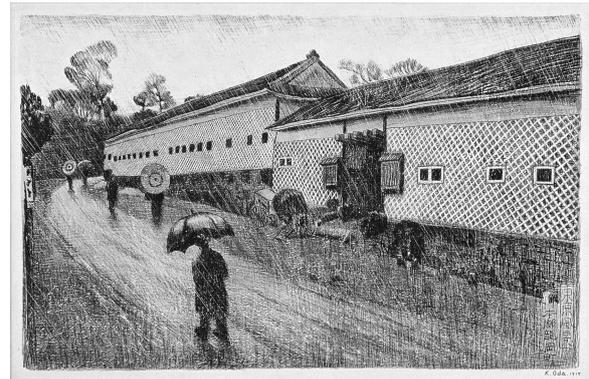
江戸から明治へと時代が変わっても、東京の街を支える木材の中心地として、深川の木場がその役割を担っていました。

大正の震災、昭和の戦災を経験した木場は、その役割を東京の発展と共に変えてゆくことになりました。

1969年(昭和44)に新木場へその役割を譲ると、跡地は整備されて、現在は木場公園となっています。

### 16) 東京風景 本郷龍岡町

織田一磨 1917年(大正6)2月



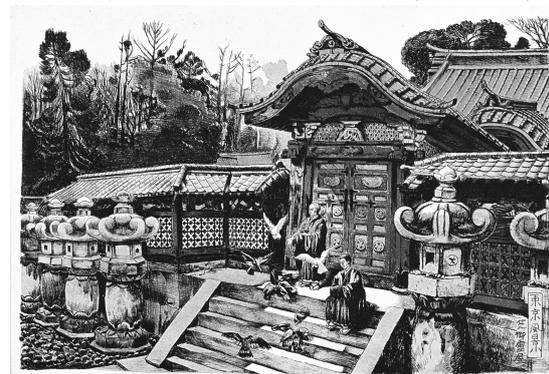
作品では、加賀前田藩本郷邸の東御門とそれに続く表長屋を描いています。

藩邸は1868年(明治元)の火災で建物の大半を焼失してしまいましたが、敷地が帝国大学(現:東京大学)となった後も、門と表長屋は姿をとどめていました。しかし大学の敷地拡張のなか、1923年(大正12)に北側が、1931年(昭和6)頃にはすべて撤去されてしまいました。

現在は東京大学龍岡門より医学部敷地内を北に延びる道が、かつての門と長屋に沿った道として残っています。

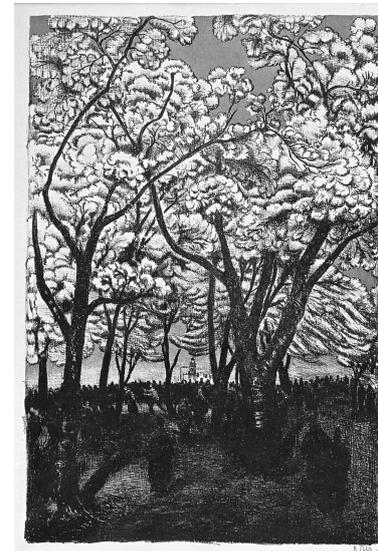
### 17) 東京風景 芝御霊屋

織田一磨 1917年(大正6)3月



### 18) 東京風景 上野之桜

織田一磨 1917年(大正6)4月

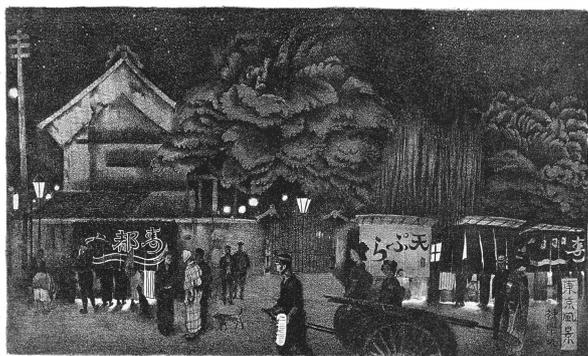


### 19) 東京風景 品川の雨

織田一磨 1917年(大正6)6月

## 20) 東京風景 神楽坂

織田一磨 1917年(大正6)7月



飯田橋から神楽坂を上がる途中にあるのは、毘沙門天の信仰を集めている鎮護山善国寺です。善国寺は1792年(寛政4)に麴町から神楽坂へ移転し、それまで武家地であった神楽坂が人々で賑わう切っ掛けとなりました。善国寺の縁日では明治20年頃から夜店も並ぶようになり、一層賑わうようになりました。

作品では寿司や天ぷらなどの夜店が並び、街灯に照らされた人々の行き交う様子が描かれています。

## 21) 織田一磨君作東京風景版画集の序

永井荷風 1917年(大正6)7月

「東京風景」が二十点で完成すると、氏は作品に台紙をつけ、凡例と永井荷風の序文をあわせ、セットにして売り出しました。

荷風氏の文章は、一磨氏の石版画による表現方法から、取り上げた風景への賞賛と合わせ、北斎や広重、小林清親の風景版画と並ぶ作品として紹介しています。またこの文章は、同年発行の雑誌「文明」第十七号に、多少の修正を加えて掲載され、さらに1926年(大正15)の「荷風文藁」へ、「東京風景版画集叙」として、改題修正された文章が収録されています。

## 22) 東京風景 凡例

織田一磨 1917年(大正6)7月

## 23) 「武蔵野」第229号 織田一磨氏を偲ぶ

武蔵野文化協会 1956年(昭和31)

織田一磨氏が1956年(昭和31)に急逝すると、地元の文化団体である武蔵野文化協会機関誌「武蔵野」第229号で、追悼号が特集されました。

誌面では氏の横顔と合わせ、氏に寄せる文章として、

著書挿絵で関係のある野田宇太郎氏、明治40年代より交流のあった石井柏亭氏、地元武蔵野に居住している武者小路実篤氏などが寄稿しています。

## 24) 単行本「浮世絵十八考」

織田一磨 1926年(大正15)

## 25) 単行本「浮世絵と挿絵芸術」

織田一磨 1931年(昭和6)

## 織田一磨 (おだ かずま)

1882年(明治15)11月11日

1956年(昭和31)3月8日

幕府旗本であった父織田信徳(おだ のぶのり)、母やすの四男として、東京の芝の地に生まれました。

一家は石版画工として成功していた兄の東禹(本名:明)を頼り、12歳の時に大阪へ移りました。その後兄より絵の初歩と石版画を学び、金子浅次郎の下で石版画の修行をしました。

十代の頃は水彩画による作品を描き、1902年(明治35)には、新古美術展覧会(京都)で一等を受けます。翌年東京に戻り、石版画工として働く傍ら、川村清雄に師事し、トモエ会に作品を出品するほか、1908年(明治41)には「方寸」に石版画を発表しました。

1916年(大正5)より自画石版「東京風景」二十枚の制作に取りかかり、完成後、続いて「大阪風景」二十枚を制作しました。

(自画石版:作者が直接版の面に描き、制作する石版画)その後数多くの作品を制作する傍ら、浮世絵の研究に関する文章も多数発表し、単行本も出版しました。晩年は吉祥寺にアトリエを構え、作品を発表しますが、1956年(昭和31)に自宅で急逝しました。

『享年73歳』

## おもな参考文献

- 図録「織田一磨展 明治・大正・昭和—うつりゆく風景」  
2000年 町田市立国際版画美術館
- 図録「織田一磨展」 1989年 武蔵野市
- 季刊「銀花」第33号 石版画詩人 織田一磨の世界  
1978年 文化出版局
- 創作版画の人々—1 織田一磨 1979年 現代版画センター  
「版画芸術」82号 巻頭特集 織田一磨 東京・大阪今昔物語  
1993年 阿部出版

## GAS MUSEUM がす資料館 企画展ご案内郵送申込について

ご来館ありがとうございます。これから3ヶ月ごとに開催されます、「GAS MUSEUMがす資料館 企画展」のご案内はがきの郵送をご希望の方は、官製ハガキに ①氏名 ②連絡先住所 ③年齢 ④電話番号 ⑤感想・意見 ⑥今後希望する企画展、をご記入の上、下記の住所までお申し込みください。  
次回より約1年間、毎企画展ごとにご案内ハガキを無料で郵送します。

(ハガキ持参で来館された方は、そのまま継続して登録されます)

〒187-0001 東京都小平市大沼町4-31-25 GAS MUSEUMがす資料館「ご案内ハガキ」係

TEL(042)342-1715 FAX(042)342-8057

《当館のお客様情報(個人情報)は、当館イベント運営に必要な業務を含め、当館に関連する企画、及びサービスのご案内のために使用いたします。》